

「ムイカ」

作 はしぐちしん

登場人物

女 A (幸子)

B (文子)

C (光子)

D (母)

男 (父)

口上

本日はご来場いただきまして、誠にありがとうございます。上演に先立ちまして二三おしらせがございます。(非常口等の劇場設備に関する諸々をお伝えする)

それから携帯電話についても、ご配慮をお願いします。最近の携帯電話話は写真や動画も撮れるようになっておりますが、こちらは一応ご遠慮いただきます様、お願いします。あの携帯のカメラってシャッターを押す時にチロリロリンとかって音がしますし、液晶画面の明かりがぼんやりと周囲を明るくしてしまいますので、申し訳有りませんが、よろしく願います。

まあ昔、私が演劇に関わり始めた頃は携帯電話なんかは無くって、こんな心配する事はなかったんですけどね。あの頃はもっぱらポケットベルとか、アラーム付き腕時計でした。ポケットベルは言うに及ばず、アラーム付き腕時計ってのも最近はあまり見かけないですね。30分か一時間ごとにピピって音がなったもんです。お芝居を見ている時にそれがなると、あ、1時間ぐらいたったんだなあとか思った事は有りますが、それが激しく観劇の妨げになった記憶は、私個人としてはないですねえ。今は時計も携帯電話がその代わりになっちゃいましたね。あ、だからと言って上演中にどれくらい経ったやろって携帯を開いたりするのはご遠慮下さいね。

気がつけば、この演劇、小劇場演劇というものに関わるようになって20年以上が過ぎてしまいました。月日というのはあつという間ですね。私はですね、大学入学と同時にこの世界と関わる様になりました。それまでは、広島で、あ、大学は京都なんです、大学入る直前まで、あ、生まれも違って、小学校にあがる1年前の夏から大学に行く直前の春までを広島で過ごしました。今でも両親は広島に住んでまして、年に数回は帰る様にしております。これをですね、「帰る」と言わないと母にえらく怒られます。もう人生の中では京都に住んでいる方が長くなってるんですけどね、電話で「次の週末に広島に行くわ」なんて軽く口走ったりしますと、電話の向こうから母に「行くじゃないでしょ、帰るでしょ。」とたしなめられます。

その広島市。人口117051人、面積約905<sup>2</sup>。JR広島駅で新幹線を降りて、南改札、所謂正面口を出ますと、気持ち左前方に広島電鉄株式会社、通称ひろでの路面電車の電停がございます。ここから、広島港、江波(えば)、横川(よこがわ)、西広島へ向けて、動く博物館と称される通り様々な種類の路面電車が発売しております。大正時代のちんちん電車を復刻させた100形、ドイツ・ハノーバーから寄贈された200形、神戸市電からの570形。650形は被爆電車として有名なひろでん生え抜きの車両です。750形と900形は大阪市交通局から、京都市電からは1900形。そしてLRT Light Rail Transitとして人と環境に優しい電車として開発された5100形グリーンムーバーマックス。

広島駅前を出発した路面電車は駅前大通りをさける様に一旦東へ向かい、まずは猿猴橋町(えんこうばしちよう)の電停へ。ここはまだ開発が進んでおらず、屋根の低い町並みを抜ける様に電車は進みます。しばらく行くと荒神三叉路(こうじんさんさろ)、ここで大きく右にカーブした後、荒神橋を渡り猿猴川を越えます。橋を渡った所が場町(まとはちよう)、ここで左に分岐しているのが皆実線(みなみせん)。宇品(うしな)、広島港へと向かう路線です。この皆実線の比治山橋(ひじやまばし)電停で下車をしますと、私が小学6年の冬まで過(こ)し

た町に行く事が出来ます。さて本線ですが、的場町を過ぎますと稲荷町、ここで駅前通りと再び交差をいたしました、そのままつすぐ京橋川に架かる稲荷大橋を越えて、銀山町と書いてかなやまちようへ。この辺りからビルの高さも高くなって都会っぽくなります。ついでに電停と電停の間隔も短くなって、発射したと思っただけの電停と行った感じになって来ます。急ぐ時には使えないのが広島路面電車です。銀山町を出ますと、路面電車の写真撮影には絶好のポイントである歩道橋をくぐって胡町(えびすまち)へ。胡町の左手には流川(ながれかわ)、薬研堀(やげんぼり)と言った広島最大の歓楽街が広がります。胡町から百メートル程で八丁堀(はっちょうぼり)。三越、福屋、天満屋と言う3大デパートが有る中心部。ここから南へ徒歩3分の所に有名なお好み村は有ります。この八丁堀から北に分岐している線が白島線。軌道は繋がってますが、ここだけ独立した路線。区間運賃も100円。それ以外の路線でも市内は150円です。さらに市街地を西へ向かうと立町を過ぎ、紙屋町(かみやちょう)の交差点へ。ここは交差点を挟んで東と西にそれぞれ電停があり、紙屋町東と紙屋町西。ここから南へ向かうのが宇品線、皆実線同様に広島港へ向かう路線です。紙屋町西の次が原爆ドーム前。左手には世界遺産、右手には旧広島市民球場。今年からズームズームスタジアムが出来ましたので、この辺りの風景も近いうちに変わって行くでしょう。元安川(もとやすがわ)が本川と分かれる所に架かっているのが相生橋(あいおいばし)。戦前のT字型に復元されたのは二十五年程前の事です。そして電車は本川町を過ぎ、十日市(とうかいち)へ……

「この辺りでスタッフから「長いよ」と声がかかる。

うん? ああ、そう? もうそんな時間? あ、でもここから江波線と横川線があつて、土橋(どばし)の電停とか、天満川(てんまがわ)と放水路を越えないと行けないんだけど……(ト、スタッフの顔を伺うが) ああ、そうね。もう5分以上話してるみたいで、(ト、携帯電話

で確認をしながら）申し訳有りません。それでは、あ、そうそう私も携帯を切りますね。それでは、ただいまより開演です。

まるで能舞台のように四角く区切られかさ上げされた舞台。その周りに通路が有る。具象的なものは何もない。

舞台上には女Aが横になっている。

男が客席通路に現れ、劇場に遅れて来たお客を案内するように、舞台の方へと向かう。その後、女と女Cがついて来ている。

男は他のお客への気遣いかひそひそ声で女に話しかける。

男 あ、こっちこっち。

女C・D ……。

男 どうかした？

女D いやあ。

女C その？。

男 何？

女D いや？。

女C その？。

女D 何と言うか。

女C 気配と言うか……。

女D 視線と言うか……。

男 うーん、そうねえ。

女C ほら、何か、この辺り。（ト、客席を見回す）

男 難しい質問だ。

女D うん？

男 確かに気にはなっているんだ。

女C だよね。

女D やね。

男 先ほどから確かに、何やら我々を見つめる視線を、いや、ひよっとすると視線を向けてはいなくとも、意識は我々のこの話し声に向けてい

る。意識の視線の様なものを、感じるんだよね。

女 C だよね。

女 D やね。

男 しかし、それを意識してしまっただけならダメなんだ、と思う。

女 C そうなの？

男 世界に関わる問題だから。

女 D うん？

そこへ、遅れて来た客の様に女Bが入って来る。

女 B ごめん、ごめん、遅くなった。ん、どうかした？

男 世界に関わる問題だから。

女 B 何が？

女 C 何か感じない？

女 D 視線とか気配とか？

男 だから、ダメなんだって、それを意識するのは。

女 D そうなん？

男 ・・いや、確かに適度に意識する方が良いと言う意見も有るのも事実  
だけど。

女 B 何の話？

女 C 世界の話。

女 D そうそう、さっきからそればかり。

男 だから、その距離感が大切なんです。そうやってこの小さな世界は成  
り立ってるのですから。

女 B はあ。

女 C へえ？。

女 D ふーん。

男 例えば、

女 B はあ。

女 C へえ？。

男 聞いている？

女 B C D、うなずく。

男 例えば、ここを映画館だとする。

男と女 B C Dは客席を通り抜け、せり上がった舞台の端に横一列になつて腰掛ける。どこからともなく映画館の様な音が聞こえて来る。すると、そこは映画館になる。4人は映画を観ている。  
女 Bの携帯電話がなる。

女 C ちよつとお。

女 B あ、ごめん。

女 D 切つときや。

女 C 恥ずかしいわあ。

女 B だから、ごめんって。

女 C まったく。

女 B だから、ごめんって言ってるじゃない。

女 C ごめんって思つてないでしょ。

女 B 何だよ。

女 C 別に、何となく。

女 D ちよつと、静かにしつて。あんたらだけじゃないんよ。

女 B・C ごめんなさい。

女 D ほんま、ええかげんにしいや。

男は女 B C Dの様子を見る。

男 例えば、ここを電車の中だとする。

するとそこは電車の車内になる。全員横一列のまま、電車に揺られて  
いる。

女Bの携帯電話がなる。

女 C ちよつとお。

女 B あ、ごめん。

女 D 切つときや。

女 C 恥ずかしいわあ。

女 B だから、ごめんって。

女 C まったく。

女 B だから、ごめんって言ってるじゃない。

女 C ごめんって思ってるじゃないよ。

女 B 何だよ。

女 C 別に、何となく。

女 D ちよつと、静かにしつて。あんただけじゃないんよ。

女B・C ごめんなさい。

女 D ほんま、ええかげんにしいや。

男は女B C Dの様子を見る。

男 例えば、ここを美術館だとする。

するとそこは美術館になる。全員立ち上がり、それぞれでそれぞれの  
美術品を鑑賞している。

女Bの携帯電話がなる。

女 C ちよつとお。

女 B あ、ごめん。

女 D 切つときや。

女 C 恥ずかしいわあ。

女 B だから、ごめんって。

女 C まったく。

女 B だから、ごめんって言ってるじゃない。

女 C ごめんって思っていないでしょ。

女 B 何だよ。

女 C 別に、何となく。

女 D ちょっと、静かにしつて。あんたらだけじゃないんよ。

女 B・C ごめんなさい。

女 D ほんま、ええかげんにしいや。

男は女 B C Dの様子を見る。

男 解った？

女 D ふーん。

女 C へえ？。

女 B はあ。

男 世界の事。

女 D ふーん。

女 C へえ？。

女 B はあ。

男 私たちがここを海だとしてしまうと、ここは海になり、

波音や海猫の鳴き声が聞こえる。

男 日差しの強い夏のとある日だとすると、そうにもなる。

日差しがカツと強くなり、蝉の鳴き声が聞こえる。

男 想像すれば世界は変容する。それがこの世界のルール。

女 D ふーん。



女 C へえ？。

女 B はあ。

男 ま、ここでしゃべったり何たらしたら、世界を創造出来る訳ね。

女 D ふーん。

女 C へえ？。

女 B はあ。

男 じゃ、行こうか。

男は女たちを促し、舞台中央に横になっている女Aの方へ向かう。

男 例えば、ここを病院の中だとする。

女Aを見舞う様にたたずむ男を女BCD。

女Bの携帯電話がなる。

女 C ちよっとお。

女 B あ、ごめん。

女 D 切つときや。

女 C 恥ずかしいわあ。

女 B だから、ごめんって。

女 C まったく。

女 B だから、ごめんって言うてるじゃない。

女 C ごめんって思っただけじゃないよ。

女 B 何だよ。

女 C 別に、何となく。

女 D ちよっと、静かにしって。あんただけじゃないんよ。

女B・C ごめんなさい。

女 D ほんま、ええかげんにしいや。

女Aが目を覚まし、ゆっくりと起き上がる。

男はそれを支えるように寄りそう。

男 気分はどう？大丈夫？

女 A うん。

男 顔色、随分よくなった。

女 D 良かったあ、おばあちゃん。

女 A え？あたしおばあちゃん？

女 B うん、ホント良かった、おばあちゃん。

女 A えっと？

女 C 一時はどうなるかと思ったよ、おばあちゃん。

女 A あのお？

女 D 良かったあ、おばあちゃん。

女 B 本当にね、おばあちゃん。

女 C ね、おばあちゃん。

女 A おばあちゃん。

女 B・C・D うん、うん。

男 ルールですから、世界の。

女 A はあ。

女Aはあきらめておばあちゃんになる。そして、ゆっくり全員の顔を見回し、うなづく。

男 なんか飲む？

女Aはゆっくりと首を横に振る。

女 B あたし喉乾いた。

女 C あ、あたしも。

女 D 売店って中にあった？

男 自販機だったら有った様な気がするけど。

女 B コンビニ出た所にあつたよ。

女 C ちよつと行って来て。

女 B あたし？

女 C のど乾いたんでしょ？

女 B あんたもでしょ。

女 C あたし、お茶。

女 D あたしは水で。

男 あ、じゃあ、缶コーヒー、砂糖なしのミルク入。

女 B 結局あたし？

女 C よろしく。

女 B もう。

女Bが立ち上がろうとすると、女Aが遠くを指差す。

女 A ああ。

男 どうかした？

女 C ん？

全員で女Aの指し示す方を見る。遠くに飛行機が飛んでいる。

男 ああ。

女 D 何？

男 うん。

女 D ああ。

男 飛行機かな？

女 B・C・D あ。

男 ん？

女 A 何か、落ちて来た。

暗転。

暗闇の中、男の音がする。

男 例えば、ここを。

明かりが点くと舞台の隅3カ所に女が3人座っている。男と女Aは残った一隅に立っている。

男 どうぞ。

女 A ここは？

男 これからしばらくあなたの過ごす場所です。

女 A はあ。

男 すぐ慣れますよ。

女 A あのこと。

男 そうそう、ご紹介しなくては。皆さん、どうも。ご機嫌いかがですか？今日は新しい人をご紹介します。あ、こっちに。（ト、女Aを招きよせる）どうぞ、よろしくお願いします。

女 A よろしく、お願いします。

三人の女の視線が女Aに集まる。

女 B いらっしやい。

女 C あ、ここおいで、ここ空いてるから。

女 A はあ。

女 D そんな所に突っ立てても何も出てこんよ。はよ、座り。

女 A あ、はい。

女Aがその場に座りかけると、女Cが立ち上がり。

女 C ああ、そうそう。

女Cの声で女Aは何となく座りそこねる。女Cは何かをとり、舞台袖に消える。

女 D はよ、座りや。  
女 A あ、はい。

再び女Aが座りかけると、女Cが手にスリッパを持って戻って来る。女Aはやはり座りそこね、中腰のままている。

女 C はいはい、これこれ。

女Cは女Aにスリッパを渡す。女Aは立ったままそれを受け取り。

女 A あ、どうも。ありがとうございます。  
女 D はよ、座りつて。  
女 A はい。  
女 B あれ？

女Aは座れない。

女 D 何？  
女 B 誰の？  
女 C 余ってるの。  
女 D 余ってるのって？  
女 B 人数分しかなかったんじゃない？  
女 D そうそう。  
女 C ちがうちがう、ほら、だって。  
女 D ああ、そうか。  
女 C そうでしょ。  
女 B ああ、そうか。

女 D そうそう、そうやった。

女 C だからね、大丈夫。（ト、女Aに）

女 A あ、どうも。

女 D はよ、座り。

女 A あ、はい。

女Aは受け取ったスリッパをはいて座る。しかしスリッパをはいたままの正座はどうも感じが良くない。女Aはスリッパを脱ごうと、もう一度、立ち上がる。

女 D もう、座りつて。

女 A あ、すいません。

女Aはすぐさまスリッパを脱いで、座る。

女 D あんたがそこに立つとると、テレビが見えにくいんや。

女 A すいませんでした。

女 D ええけどな。

女Aはゆっくりと振り返り、女Dの視線の先を見るが、もちろんテレビなどは舞台上にはない。女Aはとっても訝しげに視線を戻す。

男 ルールですから、世界の。

男がいつの間にか女Aの側にいる。

女 A はあ、世界、ルール。

男 はい。ほら。想像すれば、変容する。

するとザーというテレビのノイズ音が女Dの視線の先から聞こえて来

る。

男 それでは皆さん。後はよろしくお願いしますね。

女 B・C・D はい。

男 では、又、後ほど。

男は去る。

女 D あんた、スリッパは？

女 A へ？

女 B スリッパ、スリッパ。

女 B C Dは少し腰を浮かし、自分のお尻の下に隠し置いたスリッパを確認する。

女 B あたしのはここに。

女 D あたしもある。

女 C あたしもOK。

女 A あ、はい、私も。

女 Aは自分が座っている横に置いてあるスリッパを指差す。

女 C あーあ。

女 D ああ。

女 B あー。

女 A え？どう言う事ですか？

女 C あれ？説明なかった？

女 A えっと・・・。

女 B 自分のスリッパは自分で管理する。これこの基本。

女 D そうそう、脱いだらすぐお尻の下。これこの基本。

女 A はあ。

女 C あ、解ってない。

女 A ルールですか？

女 D ちよつとちやう。

女 A はあ。

女 B 基本。

女 A きほん。

女 D ベーシック。

女 B 英語で言えば良いつてモンじゃない。

女 C そうそう。

女 D ええやんか。

女 A で、その、基本は？

女 C ああ、そうそう、こうするの。

女Cは腰を浮かせ、自分のお尻の下にあるスリッパを取り出す。それを揃えて、その上に調度お尻がくる様に正座をする。

女 A はあ、こうですか？（ト、真似てみる）

女 D こないするとな、ほら、立ち上がった時に、自分の真下にスリッパがくるやろ。

女 B そうそう。

女 A はあ。

女 B あれ？何か腑に落ちない感じ？

女 A いやあ・・・。

女 C いいよ、言ってみて。

女 A その、何かもぞもぞしません。

女 D そうか？

女 B まあ、言われてみればね。

女 C まあ、慣れちゃってるしね。

女 A こう、右か左に決めて、置いておいてはダメなんですか？



女 D うーん。

女 A ほら、利き腕だと取りやすいし。

女 B うーん。

女 A あ、じゃあ、良いですか？右利きの人？

女 A は手を挙げるが、女 B C D は反応しない。

女 A あれ？

女 B それは何をするときの？

女 A え？

女 B もの書く時？投げる時？コップ持つ時？受話器を持つ時？もしくはバッテリーボックスに入る時？

女 A バッテリーボックスに入るときはないです。

女 C じゃあ、どれ？

女 D どれどれ？

女 A あ、じゃあ、お箸持つときはどっちですか？

全員右手を挙げる。

女 D そりゃ、皆そやで。

女 B そうね、あたしたちはね。

女 C 小さい頃に、絶対直されたよね。

女 D そうそう。ま、あたしは元々だけどね。

女 B あたしも。

女 C わたしもそうだけど、妹が矯正されてたな。

女 A 私は・・・

女 C 妹、石切りするときは左だったなあ。

女 A 石切り？

女 B やらない？

女 A いやあ・・・。

女 D 小さい頃、ようやったなあ。

女 C 河原でね、平べったい石を見つけて、川の水面に向けて、こう。(ト、立上がって、大きく振りかぶる)

川のせせらぎが聞こえて来る。

女 C こうやって、下手投げで、こんな風に石を投げる。と、石が水面でピッと跳ねる。

女 B 勢いの収まらない石は跳ねた先でもう一度、ピッ。

女 D 次はさつきよりも短い距離で三度目の跳躍をする、ピッ。

女 C ここからが勝負所。

女 A 勝負？

女 C こどもの遊びだからね。

女 D しょーもない事で優劣をつけたがる。

女 C 石は三回の跳躍でその勢いを失いつつある。後、何回跳べるのか。ピッ・ピッ・ピッ。

女 D 四、やな。

女 C えー、六、ろく。

女 B いや、四。最後のは跳ねてない。

女 C えー！

女 D あかんあかん、ちゃんと跳ねてないと。短くてもちゃんと滞空時間が有ってこそ、一回や。

女 C ぶー。

女 B じゃ、おまけして、5回。

女 D あかん。

女 C じゃあ、見せて。

女 D お？

女 C 六。ちゃんとした六、見せて。

女 D よし、見せたる。

女Dは立ち上がり、良さそうな小石を拾い川面に向かう。大きく振りかぶって、アンダースロー。小石が川面へと低い弾道で飛んで行く。ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ。小石が川面を切って跳んでいくのにあわせて、女たちの頭が上下する。そして回目の跳躍。

女 A あつ。

石は川中にある岩に当たり、大きく跳ね上がってから水中に没する。それにあわせて女たちの視線は一旦上に上がり、弧を描いて下へ。

女 D 六や。

女 C あり？

女 B うーん。

女 D 六や。

女 C 最後のは岩に当たったでしょ。

女 D 六。跳ねた回数が問題であって、何に当たったかは問題ではないの。たまたまそこに岩があっただけ。最初っから狙ってた訳やないし。って言うか狙えるんやったら狙ってみたらええやん。

女 C ずるい。

女 D ずるないわ。だから狙ったらええやん。

女 C ずるい。

女 B どう思う？

女 A いや、私は。

女 C そうだ、やってみて。

女 A はい？

女 C 石切り。

女 A はあ。

女 B じゃあ、これで。良い石、拾っておいてあげたから。(ト、石を渡す)

女 A どうも。(ト、受け取り)

女Aは立ち上がり、大きく振りかぶって石を投げる。石はピツと最初の跳躍で大きく跳ねる。

女 D お！

ドボンと石は水中に姿を消す。

女 A あ。

女 C あーあ。

女 B いい石だったのに。

女 A すいません。

女 C 左だね、投げるの。

女 A え？ああ、そうですね。でも箸は右ですよ。あれ？

女 C 直されたとか？

女 A さあ、物心ついたときはこうでした、多分。いや、でも良く覚えてないですね。

女 B ふーん。

女たちは何となく、もといいた自分の場所へと落ち着く。

女 D で？

女 A はい？

女 B みんな、箸を持つ手は右みたいだけど？

女 A ああ、はい。あ、だから、スリッパ。

女 C はい。

女 A だから、その、自分の右側に置いておいてはいかがでしょうか？

女 C そうねえ。

女 A ダメですか？

女 D ちよっと試してみよか？

女 A はあ。

女 D 音楽。  
女 A はい？

女 B C Dは音楽とともに立ち上がりスリッパを履き、うろろと動き回る。それにつられる様に女 Aも立ち上がり、良くわからないが女たちと同じ様にうろろ。

女 A あの、

女 Aが話そうとした所で音楽が止まる。

女 D はい。

女 A はい？

女 D 座りって。

女 A ああ、はい。

女 Aはその場に座り、スリッパを自分の右側に揃えて置く。女 B C D近くにいる順に女 Aの左横に、その左横にと車座になるように座っていく。そして、それぞれ自分の右側にスリッパを揃えて置く。4人が座り終えたが、最初に座った女 Aと最後に座った女との間には他の人たちよりも少し幅が大きく空いている。調度網一人座れるくらいの幅である。そこに男がスリッパを履いて現れ、その空いている所に、同じ様に右側にスリッパを揃えて置く。5人が車座になって座り、その間にはそれぞれのスリッパが置いてあると言う状態である。しばしの沈黙。まるで誰かが台詞を忘れたかの様な沈黙。

男 お邪魔しました。

男は自分の左側に置いてある（つまりは女 Aの）スリッパを履いて去る。女 B C Dはサッと右側にある自分のスリッパを確保して立ち上がり、

女Aとの距離を取る。取り残される女Aと少し離れた所にある男がはいて来たスリッパ。女BCDは女Aの行動を凝視する。その視線に耐えきれず、女Aは男が履いてきたスリッパににじり寄る。

女 D ほら。

女 B うん。

女 C だね。

女 A いや……。

女 C こうやって戦争は始まるんだね。

女 A は？

女 D なんで？

女 A いや、だって。

女 B それしか残ってなかったから？

女 A はあ、まあ。

女 C でも、それは自分のではないと気づいてはいた。

女 A あ、でも、スリッパだし。

女 D どれでも一緒か？

女 A はあ。

女 D よう見ても。

女Aはスリッパの内側を覗いてみる。何か名前の様なものが記されている。

女 A あ。

女 D やろ。

女 A すいません。

女 C いやいや、良いんだけどね。

女 A あのー、すいません。(ト、男を呼ぶ)

男が出て来る。

女 A これ、間違ってます。

男は自分の今履いているスリッパを脱ぎ、確認する。

男 あ。

女 A はい。(ト、スリッパを渡す)

男 あ、すいません。

女 A あ、いえ。

女 C こうやって戦争は回避された。

男 あ、でも・・・ま、いいか。

女 A え、何です？

男 これ、履きました？

女 A あ、はい。あ、間違えちゃって、あ、いや、その。スリッパだし、どれも一緒かなと思って。

男 そう。

女 A すいません。

男 そうかあ。

女 A はあ。

男 履いたかあ。

女 A え、何です？

男 (意を決して)水虫とか大丈夫です？

女 A ちよつ、

男は女Aの返答を聞かずに、スリッパをその場に放置して逃げる。

女 A ・・失礼な。

女 C こうして火種を残した。

女 B まあまあ。

女 C まあまあまあ。

女 D そこ、座りつて。

女 A 何なんです、あの人。

女 B まあまあ。

女 C まあまあまあ。

女 D ま、解ったやろ？

女 C こうならない為にもスリッパはお尻の下。

女 B そう言う事。

男がこつそり手に除菌スプレーを持って現れ、放置したスリッパにスプレーをかける。そして、不敵な笑みを女Aに向け、スリッパを持って去る。

女 A あ。

女 B まあまあ。

女 C まあまあまあ。

女 D あかんよ。

女 A ええ、わかってますよ。(ト、歯ぎしりをしながら)

女 B まあまあ。

女 C まあまあまあ。

女 D 落ち着き。

女 A だいたい誰なんですか？あの人。

女 C そうねえ。

女 B 何て言えばいいかなあ。

女 C 管理人？

女 D マネージャー。

女 B 支配人？

女 D マスター。

女 C 助言者？

女 D アドバイザー。

女 B 英語で言えば良いつてモンじゃない。



- 女 C そうそう。
- 女 D ええやんか。
- 女 B 世話役？
- 女 D コンシェルジュ。
- 女 C だから。
- 女 B ん？英語？
- 女 C ん？
- 女 D ま、ひつくるめて、大黒柱みたいなもんよ。
- 女 C 大黒柱って英語でなんて言うの？
- 女 B 知らない。って言うか、あんたまで？
- 女 C あ、いやいや。
- 女 A 大黒柱？
- 女 B 一家の。
- 女 C そうそう。
- 女 A お父さん？
- 女 B お母さん。
- 女 A はい？
- 女 C 大黒柱がお母さんの家も有るよね。
- 女 B そうね。
- 女 D ま、家の中支えるのは必然的にお母さんやけどな。
- 女 C そうやって、父の権威が落ちていく。
- 女 B 亭主元気で留守が良いっていつの話？
- 女 D いやいや、そんな事あらへんよ。お父さんの事はたよりにしてるんよ。
- 女 A えっと、であの人は？
- 女 B まあまあ。
- 女 C まあまあまあ。
- 女 D ま、物事には順番ってもんが有ったり、無かったりするから、まあ、その内、その内。
- 女 A 何か、答えになってないです。
- 女 C あ、お腹すいてる？

女 A え？いや、別に。  
 女 D 腹減ると、むずがるしな。  
 女 A そんな子供じゃないです。  
 女 C これあげるわ。

女 C はポケットの中からキャラメルを1個取り出し女 A に差し出す。

女 A ……。  
 女 C 良いから。  
 女 A すいません。  
 女 D そう言う時はすいませんやのーで、ありがとうの方がええで。  
 女 A あ、ありがとう。  
 女 C うん、甘いよ。  
 女 D ええから、食べ、美味しいで。  
 女 A あたしだけ？  
 女 C あたしらは良いよ。こう言うときは新入りに譲るのが基本。  
 女 D 食べ。  
 女 A ありがとう。

女 A は紙の包みを開き、キャラメルを口に入れる。甘さが口に広がる。

女 C 美味しい？  
 女 A 何か、懐かしい。  
 女 B そっか、良かった。  
 女 D その味、忘れんといてね。  
 女 A え？  
 女 D よし、じゃあ大奮発。もう一個づつ皆にあげよ。ちよっとお！（ト、男を呼ぶ）

男が出て来て、女 D にキャラメルの箱を渡す。女 D はその中から女 B

Cに一つづつ渡す。そして、女Aにも、もう一つ渡そうとする。

女 D あら、これが最後やわ。

女 A あ、じゃあ、はい。

女Aは一旦キャラメルを受け取るが、女Dに渡そうとする。

女 D ええの、ええの。

女 A いや、だって私は今、

女 D ええから。

すると女BとCも手にしたキャラメルを女Aに押し付ける様に渡す。

女 A え？

女 B 良いから。

女 C お母ちゃんには内緒な。

女 A はあ。

男と女B、C、Dは並んで女Aを見ている。

女 A あの、

男 あ、ほら。(ト、上空の何かに気が付く)

女 C あ、何か飛んでる。

女 A え？

女 B ほら、あそこ。

女 D ああ。

女 A あれは？

男 ただの飛行機です。

女 A そうですか？

男 気になりますか？

女 A 少し。

男 そうですか。

ゴーと上空を何か飛んでいる。

男 例えば、あれを某国のロケットだとすると。

男は去る。

ノイズに混じり、ニュースの音声が聞こえて来る。それはかの国が打ち上げた飛翔体が領空を飛び越えて大海に落ちた時の会見だったり、あの大戦の開戦を告げるラジオニュースの音声だったり、遠く離れた国のビルに航空機が突入したニュースを伝えるアナウンサーのコメントだったりが入り交じっている。

女 B あらあら。

女 C あらあら、あらあら。

女 A はい？

女 B 大変な事になったねえ。

女 D 何が？

女 B 何がつて、あんた、これじゃまるで、ねえ。

女 A えっと？

女 C そうそう。これじゃねえ、本当に。

女 B 戦争。

女 A え？

女 D 経験した事ないくせに。

女 B そりや、まあね。ある？（ト、女Aへ）

女 A いや、私は。

女 C そりやそうでしょ。この平和な国にずっと生きて来たんだもの。

女 A はあ。

女 B 先の不幸な戦争？

女 C 世界大戦？って言う方が一般的？

女 B 先の大戦。

女 D ね、何て言うの？

女 A あ、そうですね・・・太平洋戦争。

女 B 中国は？

女 A はい？

女 B 中国とのは太平洋に含まれるの？

女 A えっと・・・。

女 D どうなん？

女 A 多分。

女 C 多分、どっち？

女 A 含まれる方で。

女 D ふーん。

女 C 大東亜とは言わないの？

女 A 私はあまり・・・

女 C そう。

女 D そう言えば、何年経ったんだっけ？

女 B 70年？80年？

女 D そりゃ言わんわ、大東亜。死語か？

女 B 死語？

女 D 死語って言葉も使わんねえ。

女 C そうねえ。

女 D で？

女 C 戦争みたいよ。

女 B 久しぶりに。

女 C 久しぶりって、フキンシンな。

女 D ふーん。

女 C ふーんってあんたね。

女 A あの？

女 D 何？

女 A 戦争なんですか？

女 B みたいよ。

女 C そうそう。

女 D テレビが言ってたで。

女 A いや、テレビって？

女 A が振り向いても、もちろん、そこにはテレビはない。ただザーと  
言うノイズの中からニュースの音声聞こえる。

女 D な。

女 A ・・はあ、でも。

女 B ま、関係ないけどね。

女 C そうそう。

女 A 関係ないって？あ、何か遠いところの話ですか？

女 B あ、お隣ぼいけど。

女 A え？じゃあ、

女 B ま、関係ないけどね。

女 A いや、

女 D だって関係ないやん。

女 A はあ・・

女 C でも関係ないかも知れないけど、大変だよな。

女 B 本当にそう思う？

女 C だって、戦争だし。

女 D うーん。

女 C 人が死ぬし。

女 D 人ぐらい、毎日毎日死んでるやん。

女 B まあ確かに死んではいるね。

女 C 人が人を殺すし。

女 D それも毎日の様におこっているよ。

女 A えっとお。

女 B あたしたちが気にしたってねえ。

女 C そっか。

女 B 何にも出来ないし。

女 D どうにも出来ないし。

女 C そうかなあ

女 B じゃ、何が出来る？

女 C うーん。

女 B どう？

女 A は？

女 C あ、どうなの？

女 A いや？。

女 D ほら、やっぱ何も出来ひん。

女 A いや、そんな事は。

女 B じゃあ、何？

女 D 何？

女 A ……その、色々考えます。

女 C 何を？

女 A その、戦争の事を、何でそうなったのかとかを。新聞見たり、ニュー  
ス見たりして。

女 B で、ビール片手に熱く語りあったり？

女 D 匿名でネットに書き込みを試したり？

女 A あ、いや。

女 C ふーん。

女 B そうかあ。

女 D な、やっぱ何も出来ひん。

女 A あ、じゃあ、祈ります。

女 C じゃあって。

女 D 祈るって何を？

女 A 平和を。

女 B あーあ。

女 C うーん。

女 A だって何もしないよりは良いかなと思って。

女 C 誰に？

女 A は？

女 C 誰に祈るの？平和。

女 A ああ・・・。

女 B ほらね。

女 D そやな。

女 C じゃあ、神様にする？

女 A へ？

女 D へー。

女 B へー。

女 C どうだろ？

女 B じゃあ、どの神様にする？

女 C ああ、そうね。

女 B 神様も色々いるし。

女 C うーん。

女 D うーんやのうて。

女 C うん。

女 B だから、どの神様？

女 D 西の方とか、東の方とか。

女 B 北の方とか、南の方とか。

女 D お祈りの方法も様々やろ。

女 C そうねえ。

女 B どれ？

女 A え？わたし。

女 D そや、どれ？

女 C そうそう、どれにする？

女 A どれって言われても・・・

女 B あ、じゃあ、例えばこんな感じのやつとか？



女 D 例えばこんな感じのやつとか？  
 女 C 例えばこんな感じのやつとか？

女 B C Dはそれぞれにそれぞれな祈り方をやって見せる。

女 A いや、ちよつと。

女 B ふーん。

女 D ふーん。

女 C ふーん。

女 A いや、その、自分自身の中でって言うか・・・

女 C ああなるほどね。

女 A はい？

女 C あなたが？って事ね。

女 A え？

女 B あんたが神様って事なの？

女 D ああ、なるほどな。

女 A いやいや。

女 B だって今ねえ。

女 D うんうん、言った言った。

女 C そうなのかあ。

女 A いや、そうじゃなくて。

女 B 違うの？

女 A 違いますよ。わたし神様なんかじゃないです。だって何にも出来ないし。

女 B ほらー。

女 D ねえ。

女 C そうそう。

女 A はい？

女 B 神様だ。

女 A へ？

女 C うん、うん。

女 B そもそも、神様は何にもしてくれない。

女 D そうそう、確かに。

女 A いや、だから・・・

女 B やっぱね。

女 D あんたが神様。

女 A だから、そうじゃなくて。

女 C 何が違うの？

女 A あたしの心の中にいるって意味なんですけど。

女 D ほらー。

女 B ねえ。

女 A ええ？

女 C そもそも、神様は自分の中にしか存在しない。

女 B そうそう、確かに。

女 A いや、だから・・・

女 D やっぱね。

女 B あんたが神様。

女 A あのね。

女 C あたしも祈ったとこ、あんたに。

女 D あ、あたしも。

女 B C Dは女 Aに対してそれぞれの形で祈りを捧げる。

女 C ちよつと、ねえ、やめて下さい。

女 A 女たちは祈りをやめない。

女 A あたしに祈られたって、世界は変わりません。

女 B まあ、そりゃそうだ。

女 C そうね。

女 D そやな。

女 C 自分の為に祈ってるんだから。

女 D なんと利己的な。

女 C 宗教なんて、そんなものでしょ。

女 D お、言うねえ。

女 B 誰かが自分の幸せを祈れば、犠牲をとまなう。

女 C きつと誰かが犠牲になる。

女 B 誰かの幸せの為に、他の誰かが犠牲にならなければならない。

女 C その為の宗教。

女 B 誰かの宗教の為に、他の誰かの宗教が犠牲にならなければならない。

女 D ちよつとそれは飛躍し過ぎ？

女 B 誰しもが、心の平安を祈るのは悪い事じゃない。

女 C それだから平和を祈る。

女 B 何と偽善的な

女 D 何とこの国的な。

女 B まあ、でもよその国の事だしね。

女 D そうね。

女 C 例えばお隣の国だったら。

女 B 火の粉が降りかかって来る？

女 D だから祈るの？

女 B 自分だけには火の粉が降りかからないように？

女 C ふーん。

ノイズの中からニュースの音声が聞こえる。

女 B あらあら。

女 C あらあら、あらあら。

女 B 大変な事になったねえ。

女 D 何が？

女 B 何がって、あんだ、これじゃまるで、ねえ。

女 C そうそう。これじゃねえ、本当に。

女 D ほんま、これじゃあねえ。

女 B ホントいつまでたっても。

女 C 同じ事の繰り返し。

女 D そやなあ。

女たちは女Aを見つめる。

女 A はい？

女 D ええの？

女 A 何がですか？

女 B こんな世界でも。

女 A えっと？

男が現れ、女Aの側に立つ。

女 A こんな世界？

男 ええ、まあ。人と人が殺戮を繰り返す世界。

女 A そうなんですか？

男 人は言いません、戦争だから仕方がないって。

女 A ええ。

男 平和を取り戻すためには仕方がないって。

女 A ええ。

男 民主主義を取り戻す戦いだって。

女 A ……。

男 私たちが受けた仕打ちを忘れたのか？って。

女 A ……リメンバー……。

男 だから仕方ないんだ、いやむしろそうすべきなんだと言う理由で、あの日はやってきました。

女 A あの日？

男 ムイカ。

女 A 六日、あの日。

男は女Aから離れる。男と女たちは女Aを取り囲む様にたたずんでい  
る。

男 1時45分。パイロットの母親の名前を冠した大型爆撃機が、小さな  
少年と言う名の一個の爆弾をその腹に抱え、遠く離れた島から飛び立  
った。6時間半後、彼らは私たちの住む町の上空にいた。

女 B その日は晴れていた。

女 C 7時9分。

警戒警報のサイレンの音がする。

女 C 警戒警報が発令された。

女 D 7時31分。

警戒警報解除のサイレン。

女 D 警戒警報が解除された。

男 8時9分。上空に到達した爆撃機は観測用の測定器に落下傘をつけて  
投下した。

女 B 地上でそれを見た人は、撃墜された飛行機からパイロットが脱出した  
と勘違いをして喜んだ。

男 8時12分。T字型をした橋に照準が合わせられた。そして・・・  
女 A そして・・・

時計がカチカチと時を刻む音が響く。

男 8時15分。

女 D あ。

女 C ほら。

女 B ああ。

女 D 何か、落ちて来た。

時計の音が止み、静寂が訪れる。

男 43秒後。上空約600メートル。小さな少年の中、ウラン235の

核分裂が始まる。核分裂開始から100万分の1秒後。大量の放射線が地上に降り注いだ。あり得ない事だが、もし仮に火球も衝撃波も起らなかったとしても、この時点で多くの人が死に至った。

女 A 100万分の1秒・・・

男 100万分の15秒後。青白い閃光と共に直径20メートル程の小さな太陽が出現する。

女 A 火球。

男 小さな太陽はその後の5秒後まで膨張を続け、すぐに収縮を始め、キノコ雲を形成する。地上には熱線が降り注ぎ、ヒトもモノも影だけが残った。

女 B ほら。

女 A え？

女 B これが、あたしの影。

見ると女Bの影がくつきりと現れている。

男 熱線の影響は3秒程で終り、続いて熱によって膨張した空気が押し出され、町を襲う。

女 A 衝撃波・・・

女 D ピカって光って、すぐに髪の毛が燃えはじめた。慌てて井戸の有る方へ走り始めたとたんに、身体が宙に舞った。

男 30分後。黒い雨が降って来た。

女 C ベトベトした雨だった。それでも口を開けてそれを飲んだ。

カチカチと言う時計の音。

女 A なんで？

男 戦争を仕掛けた報い？

女 A でも・・・

男 戦争を終わらせるため？

女 A ……

男 ……いや、違うな。

女 A え？

男 ただ殺された。ヒトの造りしモノによって。人によって、ただ殺された。

女 B C D はゆっくりとその場に身体を横たえる。そして動かなくなる。

男 繰り返されていくだけだ。世界は。

女 A でも・・・

ザーと言うノイズが聞こえて来る。

男 ニュースをお伝えします。25日、北緯38度線において北側からの砲撃が開始されました。

女 A え？

男 次のニュースです。29日、シナイ半島においてイスラエル軍が侵攻を開始しました。7日、アメリカ軍による北ベトナムへの爆撃が開始されました。24日、ソ連軍がアフガニスタンへの軍事介入を始めました。22日、イラク軍がイランの空港を爆撃しました。2日、アルゼンチン軍がフォークランド諸島へ上陸、同島を制圧しました。イラク軍がクエートに侵攻を開始、17日、多国籍軍はイラクへの空爆を行いました。

ザーと言うノイズ音。

男 11日。……たった今入って来たニュースです。ニューヨークの世界貿易センタービルに航空機が激突したもようです。現地からの中継をお伝えしております。あ、今、2機目の飛行機が突入した様に見えましたが？大きな爆発がワールドトレードセンターで起っております。信じられないような映像をご覧いただいていますけれど、これは現実の映像です。

女 A これは？

男 19日、アメリカは大量破壊兵器を所持してるとの理由でイラクに攻撃を開始。

女 D 殺されてるねえ。

女 C 死んでるねえ。

女 B 犠牲になってるねえ。

男 殺しあってる。

女 A そんな世界。

男 そ。

女 A 私。

女 B こんな世界を生きて行く。

女 A でも……。

女 C そうそう。

女 D そうねえ。

女 B 戦後何年経ったんだっけ？

女 C 70年？80年？

女 D この国ではないねえ。

女 A 戦争？

女 B 放棄したんだっけ？

女 C 正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、

女 D 国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、



- 女 B 国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
- 女 C 陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。
- 女 D なんだって。
- 女 B でも、何かない？陸海空の名を持った部隊が。
- 女 D ああ、そうねえ。
- 女 C 我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、
- 女 B 直接侵略及び間接侵略に対し我が国を防衛することを主たる任務とし、
- 女 D 必要に応じ、公共の秩序の維持に当たる。
- 女 B なんだって。
- 女 C ふーん。
- 女 D 平和だよ。
- 女 B だからって訳じゃないけど。
- 女 C そうそう、この国にいれば、戦争は関係のない事になるかもよ。
- 女 D じゃあ、大丈夫じゃない。
- 女 A こんな世界。
- 女 B 戦争のない国。
- 女 C 平和な世界。
- 女 D ヒトもあふれ、
- 女 B モノもあふれ、
- 女 C ジョウホウもあふれ、
- 女 D 食べるモノに苦労しなくなって、
- 女 B 住む所にも苦労しなくなつて、
- 女 C 便利になつて、
- 女 D 平和な世界。
- 女 B そうそう、こんな話知ってる？
- 女 C 何？
- 女 B 黄金のM型アーチ。
- 女 D 大戦の後、McDonald'sのある国同士は戦争をしてないんだって。
- 女 C ふーん。
- 女 B McDonald'sがチェーンを展開出来るくらいに豊かになると、人々は

戦争をしたがらなくなるらしい。

女 D むしろMcDonald, sにハンバーガーを求めて行列を作るらしい。

女 C ふーん。

女 B McDonald, sは平和の象徴って事。

女 C えー？

女 D だって、そうらしいよ。

女 C じゃあ何、McDonald, sをつくれれば良いってこと？

女 D そうそう。

女 B 世界のすべての国と地域にMcDonald, sを作れば、もう戦争はおきない。  
い。

女 D 世界には200ちよつとの国と地域があつて、

女 B その中でMcDonald, sのある国と地域は118。

女 C うわあ？微妙な数。

女 D ま、まだまだって事よね。

女 B だから作れば良いんだって。

女 C かの北の国にも？

女 D 内戦と飢餓に苦しむ国にも。

女 C どうするの？

女 D どうするって？

女 C 道ばたにやせ衰えた子供たちが横たわってる町に、作るの、McDonald, s。  
、s。

女 B そうそう、オレンジ色の店に黄色のネオンつけて、笑顔はただですつて、

女 D そのただの笑顔で1個が平均月給よりも高いハンバーガーを売りまくる。

女 C 誰が買うの？

女 B さあ？でも、それが豊かさの象徴。

女 D 平和の象徴。

女 C いやあ？。

男 断っておきますが、McDonald, sに個人的な恨みがある訳ではないで

すから。

女 A え？

女 B そうそう。

女 C そうなの？

女 D 毎週毎週、メールが届く。

女 B あれを食べろ、これを食べろって。

男 断っておきますが・・・、

男はどこから取り出したのかMcDonald'sのハンバーガーを頬張っている。

女 D 24時間いつでも、どこでも、黄色のMの字があたしたちを迎えてくれる。

女 B いつでもどこでも、ハイカロリー、高栄養素の食物を与えてくれる。

女 C 平和だねえ。

女 D とっても。

女 B とっても、とっても。

女 C 平和なこの国。

男 そんな世界です。

女 A はあ。

男 どうします？

女 A どうするって？

男 決めるのは、あなたですから。

女 A えっと、私は一体・・・？

男 あなたは。

男は女Aを舞台の隅に連れて行く。

男 例えば、ここを二十年八月六日の夜明け前だとすると。

するとそこはとある民家の居間となる。女Cが座って外を眺めている。  
女Bが入って来る。

女 B おはよう。(ト、通り過ぎるが戻って来て) どうしたの？

女 C ん？あ、おはよ。

女 B 何？眠れなかったの？

女 C ううん。

女 B ふーん。

女 C 今日もいい天気になるなあ。

女 B ああ、暑くなりそう。

女 C うん。

女 A これは？

男 例えばです。

女 A 想像？

男 記憶？

女 A えっと、誰の？

男 妄想かもしれません、

女 A あたしは？

男 あなたのこと。

女 B あ、泣いとる。

女 C ……。

女 B ちょっと、あんた行って。

女 C ……ん、何？

女 B だから、幸子。

女 C 幸子？

女 B 聞こえん？何かぐずってる。

女 C ふーん。

女 B ちょっとお。

女 C お姉ちゃん、行ってよ。あたし忙しい。

女 B 何が忙しいのよ。ぼーとして。

女 C 乙女は考える事が多いのよ。

女 B ふーん。

女 C 何よ。

女 B バカな事言つたらんと、はよ。幸子、あんたがあやすと一発で泣き止むんやから。

女 C もう。

女 B お願い。

女 C じゃ、あの髪飾り譲って。

女 B それとこれとは話が別。

女 C えー。

女 B 光子。

女 C しょうがないなあ。

女 C は立ち上がり、出て行く。女 B は女 C が座っていた所に行き、同じ様に外を眺める。

女 B はあ？。

女 A 幸子？

男 ええ。

女 C が戻って来る。

女 B お、さすが。

女 C 姉ちゃんが下手なんよ。

女 B そう？

女 C は座っている女 B を押しつけて座り、再び遠くを眺める。

女 C スリッパ履かせて、頭なでてやれば、すぐに泣き止むって。

女 B スリッパ？

女 C 知らんの？

女 B スリッパってスリッパ。

女 C そう、お父ちゃんの工場で作った。

女 B 何で？

女 C 知らんよ。履いとる感覚が気持ち良いんじゃない？

女 B すぐ脱げるじやろが。

女 C そやろね。

女 B だからすぐ、ぐずるんよ。

女 C 知らんよ、あたしに言わんと、幸子に言うてや。

女 B 幸子には言うても、まだ解らんやろ。

女 C じゃけん、スリッパ履かせて、頭なでなでしとんじゃないの。

女 B ほうかあ。

女 C うん。

女 B スリッパかあ。

女 C うん。

女 B ほんで、あんたは何しとん？

女 C ・・うん。

女 B 寝れんかったんじゃないの？あれ何時頃やった？

女 C 二時ごろやった。

女 B ほっか、あたしはあれからずっと寝れんかったわ。

女 C イビキかいとったよ。

女 B あたし？

女 C うん。

女 B かいとらんよ。

女 C 自分じゃ解らんじやろが。

女 B かいとらん。

女 C すーがー、す？が？って。

女 B 寝息じゃ。

女 C 寝とるじゃないの。

女 B じゃけん、熟睡は出来んかったって言う意味じゃ。

女 C そ。

女 B ほんで？

女 C 何？

女 B 何？じゃないでしょが、さつきから。

女 C じゃけん、今日もいい天気になるなあって言っとるやろ。

女 B ふーん。

女 C いけんの？

女 B 別に。

二人は座って遠くを眺める。ゆっくりとした朝の時間。そこへ女Dがやって来る。

女 D ちよつと、起きてるんやったら・・・

二人はボーと外を眺めている。

女 D どしたん？

女 B・C あ、おはよう。

女 D うん、おはよう。何？何か面白いもん見えるん？

女 B あ、うん、光子が。

女 D 何？

女 B 今日もいい天気になるって。

女 D そうね。

三人そろって朝日を眺める。

女 D 今日もええ天気になるねえ。暑なりそやねえ。

女 C はあ？。

女 D 夏は暑いもんやないの、なんねそのため息は。

女 C はあ？。

女 D なんやの？

女 B 光子、いつもの。

女 D あら、そうなん？

女 C 違うわよ。

女 B ね？。

女 C うるさい。

女 D あらあら、ね、どこの人。

女 B どうやら、

女 C うるさい。

女 B 良いじゃないの。

女 C うるさい。

女 D ふーん。

女Bは女Dにこっそり耳打ちをしようとする。

女 C (それに気が付き) 姉ちゃん。

女 B 何にも言っていない、言っていないから。

女 D ふーん。

三人は再び朝日を眺める。

女 D 文子はどうするの？

女 B あ、今日は工場。

女 D そやなくて。

女 B へ？

女 D あ、そ。

ぼんやりとした間。



女 C ねえ。  
女 D ん？  
女 C 母さんはなんで父さんだったの？  
女 D 何を言い出すかと思えば。  
女 B そう言えば、あたしも聞いたことない。  
女 D なんでやるね。パツとしてないしね。  
女 B うん、うん。  
女 D お見合いだったしね。  
女 C ふーん。  
女 D 何だって良いのよ、出会いなんて。そこから大切なんだし。  
女 C ふーん。  
女 D 生活ってのは、そう言うもんやない？  
女 C ン？  
女 D 当たり前のように毎日過ぎて行って、そうそう事件が起るもんやないし、ふっとした瞬間に今が一番幸せって思えば良いんじゃないかな。  
女 B そんな事ない。  
女 D 何？  
女 B 出会ってない。  
女 D あら、そうなの？  
女 B うん。  
女 D 気づいてないだけかもよ。  
女 C 出会っちゃったのかなあ。  
女 D あ、そうなの。  
女 C はあ？。  
女 B 母さん。  
女 D うん。  
女 B 今年に入って、3回目、あ、4回目？  
女 D あらあら、そうなの。  
女 B 何でも、  
女 C うるさい。

女 D ふーん。

三人そろって、遠くを眺める。男が入って来る。

男 おはよう。

女 B・C おはよう。

女 D おはようございます。

男 何か焦げ臭くないか？

女 D ああ！ちよつと、あんたたちも、ちやっちゃと顔洗って、手伝ってちようだい。

女 B あ、はいはい。

女 D はいは一つで。

女 B はい。

女 D は去る。

女 B ほら、光子。

女 C あたし、顔洗った。

女 B 洗ってないでしょ。

女 C もう、姉さん、うるさい。

男 早く母さん手伝ってあげないと。

女 B あ、うん。・・もう。

女 B は去る。

男 どうした？何か面白いもんでも見えるんか？

女 C うん。

男 どうかしたか？具合悪いんか？

女 C ねえ父さん。

男 何だ？

女 C ……どうして世界はこんなにも美しいんだろう。

男 やっぱ具合悪いんじゃないか？

女 C そうじゃない。

男 そうか。

女 C と男は朝日を眺める。

男 今日も暑くなるな。

女 C うん。

男 ずっと見とんたんか？

女 C うん？

男 夜明け前からそこに居るやろ。

女 C ……ああ、うん。

男 面白いか？

女 C うーん、どうだろ？

男 そうか。

女 C ……夏の間だけかな。

男 うん？ああ。

女 C うん。

男 冬場にやられたら、寒くてかなわん。凍え死ぬ。

女 C そうじゃなくて。

男 うん。

女 C 夏の間だけ、ほら、あそこ。

男 うん？（ト、顔をあげる）

女 C あそこの間から日が昇って来る。

男 ああ。（ト、顔をおろす）

女 C 夜が少しずつ溶けていって、やがて山の輪郭だけが夜を抱えたまま、くつきりと朝との境目をつくっていく。しばらくすると突然、ピカッて朝日が顔を出す。

男 ふーん。

女 C あ？

男 何だ？

女 C 朝日の顔ってどんなんだろ？

男 さあな。

女 C ……今日も一日が始まったって感じがする。当たり前前のように一日が始まる。当たり前前のように日が昇る。

男 そうだな。

女 C 冬はダメだね。もつとこっちの方で、もつと暗い。

男 地軸の傾きって奴だな。

女 C ？？

男 自転と公転って学校で習わなかったか？

女 C うーん？

男 そうか。ん。

男はポケットからキャラメルを取り出し差し出す。

男 朝、甘いものを食べると、脳が活性化するらしい。

女 C うん。

男 頭も腹をすかせるらしい。

女 C うん。

男 ほれ。

女 C うん。…うん？

男 腹すかせてないか頭？何かよー解らん事言うとるぞ。

女 C なんね。

男 ほれって。

女 C いらんよ。子供じゃなし。幸子にやって。

男 ほうか。

女 C 美味しそうに食べるから、幸子。

男 ほうか。

女 C お祭りの時に初めて食べたんよ、それからずっと、キャラメルキャラ

男  
メルって。  
ほうか。

女Aはポケットの中からキャラメルを取り出し見つめる。

女 A キャラメル。

男 ほうか。

女 C うん。

男 ・・パツとしてなくて、いいんだぞ。

女 C ン？

男 父さんが言うのも何だが。

女 C うん、・・あ、うん。

男 見た目やら、生まれ育ちやらはどうでも良いから。

女 C うーん、見た目は・・・

男 ほうか。

女 C ふふふふふ。

男 やっぱ具合悪いんやないか？

女 C 大丈夫、と思う。・・ふふふ。

男 気持ち悪いぞ。

女 C 娘に言う言葉？

男 すまん、すまん。

女 C ええけど。

男 ほうか、好きになったら全力でそんな人の事愛するんやぞ。

女 C そんなん、解つとる。

男 ほうか。

女 C ふふふふふ。

男 だけんな。

女 C 父さん。

男 いや、言うたらんぞ。みなまでは言うたらん。

女 C それ、言つとるのと同じじゃけん。

男 ああ、すまん。

女 C ふう？。

男 やっぱ、調子悪いんじゃないか？

女 C 幸子の夏風邪がうつったかな？熱は下がったね、幸子。

男 ああ、良かった。

女 C さつきぐずつとったから、スリッパ履かせといた。

男 又、スリッパか。

女 C うん。お気に入りじゃけんね、幸子の。父さんのスリッパ。

男 そうか、あれか。

女 C うん。

女 A スリッパ。

男 おおきゆうなつて、変なくせにならんとええが。

女 C 大丈夫でしょ。

男 ほうか。

女 C 又、作れる様になるやろか？

男 何が？

女 C スリッパ、父さんの工場。

男 まあ、いつまでもこんな時代じゃないじやろ。

女 C そうやろか？

男 そんな風に考えるけん、体調の悪くなるんじゃないか？

女 C ああ、うん、大丈夫。・ねえ、父さん。

男 うん？

女 C 明日も日は昇る？

男 当たり前だろう。

女 C そうね。

女 C も去る。男が顔をあげる、朝日がまぶしい。

女 A は男の側へ行き、並んで座る。

男 今日、暑くなりそうだな。

女 A ムイカ。

男 うん。

女 A あの日、わたしは？

男 うん？

女 A なんて？

離れた所に女BCDが立っている。

女 B たまたま。

女 C そ、たまたま。

女 D そうやね。

女 A わたし。

男 あれから何年たった？

女 B 70年？80年？

女 C 時間の感覚はあまりないけどね。

女 D ずっと、あんたの側におったよ。

女 A 私だけ？

男 そう、お前だけ。

女 A 何で？

女 B たまたま。

女 C そ、たまたま。

女 D 誰かが、お前を選んだのか？

女 B あ、どうだろ？

女 C 神さまって話？

女 D でも、じゃあ、あたしたちは？って話になるよね。

女 B あ、そうか。

女 C 選ばれなかったって事になる？

女 A 違う、と、思う。

女 D そやね。

女 B たまたま。

女 C そ、たまたま。

男 六日。

女 A あの日。

男 誰かが、もちろん神様なんかじゃなく、ヒトがヒトの死を望んだ。

女 B ヒトだからね。

女 C 人間だからね。

女 A たった一人、生き残った。

女 D そやから、ずっと側におったよ。

女 A いっそ。

男 いっそ、何だ？

女 A いっそ・・・

男 いいぞ、いっそ、あの日に帰って、私たちと一緒にこっちに来る事も

出来る。選ぶのはお前だ。

女 A ……。

カチカチと時計が時を刻む音が聞こえる。

女 B ま、こんな世界だし。

女 C 平和な世界じゃない。

女 B モノはとらえようかな。

女 D 表があれば、裏が有る。

女 C 日なたが有れば、日陰がある。

女 B 朝があれば、夜がある。

女 C こっちから見るのと、

女 D こっちから見るのとでは、

男 見え方が違う。

女 A だから？

女 C 平和の裏には、

女 B 混沌がある。

男 でもな、



女 A こんな世界。

女 D お前が生きて来た世界。

男 お前がこれから生きていく世界。

女 A ……。

男 どうする？

女 A わたし……。

カチカチと言う時計の音。遠くに飛行機の飛ぶ音。  
一瞬の無音。

女 B あ、ほら。

女 C ああ。

女 D うん、何か落ちて来た。

ザーと言うノイズ。

男 例えば、ここを。

女 A は舞台中央に横になる。時計の音の代わりに心音を計る機械的なピッピッと言う音が響いている。舞台の隅に男と女 D が腰掛けている。まるで病院の待ち合いにいる様に見える。女 D は携帯電話を取り出し男から少し離れた所に移動する。

女 D あ、もしもし。お母さんだけど、

女 C 留守番電話センターにお繋ぎします。プッププツ、こちら留守番電話センターです。ピーと言う発信音の後にメッセージをお吹き込み下さい。ピー。

女 D あ、もしもし。お母さんだけど、そうね、仕事だもんね、電話とれないわね。元気にしてる？こっちはね、お父さん共々元気にしてるわ。あれ、えっと、どうもこの留守番電話って苦手。昔の電話機の留守番

電話も苦手だったけど、こうやって携帯電話になってもまだあるのよね、留守番電話。何か話し方も、固くなっちゃうし。何か標準語使わなくっちゃいけない様な感じだし・・・ああ、そうそう、おばあちゃんかね、

女 C ピー。

女 D は恨めしそうに携帯を見つめている。  
舞台のもう一方の隅では女 B が車の運転席で誰かを待っているかの様に座っている。そこへ女 C がやって来る。

女 B おかえり。

女 C ああ、うん。お土産ないよ。

女 B えー。

女 C エーじゃない。

女 B 漬け物、楽しみにしてたのに。

女 C 仕事片付けて、新幹線飛び乗って来たんだから。

女 B そっか。

女 C だいたい、お土産つても変でしょ。

女 B まあ、そうか。

女 C ・・・母さんに怒られたよ。

女 B ン？何。

女 C 留守電聞いて、すぐにかけ直したんだけどね。

女 B うん。

女 C どーしても外せない会議だったし。

女 B うん。

女 C 「何とか今夜中に新幹線でそっちに行けるから」って。

女 B ああ。

女 C うん。一瞬の沈黙の後に、

女 D ちょっとあんた、行けるやないでしょ、

女 B・C 「帰るでしょ」。

女 B ま、いつもの事でしょ。

女 C うん、そうなんだけどね。でも、もうあっちの方が長いしね、住んでるの。

女 B そっか。

女 C ああ！

女 B え、何？

女 C 何で、今のとこ、曲がらないの？

女 B あたし、知らないし、そっち。

女 C もう。

女 B 何？

女 C 絶対、こっち混むよ。

女 B でも、知らないもん。

女 C もう。

一方病院の待ち合いでは。

女 D どう？

男 うん、今は落ち着いてる。

女 D そう。

男 とは言え。

女 D そっか。

男 うん。

女 D さっきメールがあって、あの子たちもうすぐ着くって。

男 そうか。

女 D よくがんばったよ。

男 うん？

女 D だって、一人でがんばってここまで来たんでしょ、お母さん。

男 ああ。早くにおとんが死んだからな。

女 D それもあるけど。

男 ……ああ、うん。

女 D 一度、ちゃんと聞きたかった。

男 話さないよ。

女 D え？

男 もう二度と話さんって。

女 D そう。

女 B C が男と女 D の所にやって来る。

女 D ああ、お帰り。混んでた？

女 B いや？混んでた、混んでた。

女 C 姉さんがあの道使うから。

女 B あたし、あの道しか知らないもん。

女 C なんで？ずっとこっちにいるんでしょ。

女 B そんな事言っても、車で駅からここに来る道はあそこしか知らないだ  
って。

女 C だから、ナビつけろって言うてるのに。

女 B あたしは地図が好きなの。で、グーグルマップより、マピオンが好き  
なの。

女 D ちよつと、あんたたち。

女 B・C ごめんなさい。

女 B の携帯電話がなる。

女 C ちよつとお。

女 B あ、ごめん。

女 D 切っときや。

女 C 恥ずかしいわあ。

女 B だから、ごめんって。

女 C まったく。

女 B だから、ごめんって言うてるじゃない。

女 C ごめんって思っでないでしよ。

女 B 何でよ。

女 C 別に、何となく。

女 D ちよつと、静かにしつて。あんたらだけじゃないんよ。

女 B・C ごめんなさい。

女 D ほんま、ええかげんにしいや。

女 B・C はい。

女 D ま、でも、お疲れさま。

女 C ごめんね、遅くなっちゃつて、どうしても一つ片付けないとならない

仕事が有つて。

女 B で、その後は？

男 ああ。今は寝てる。

女 C ちよつとあつて来る。

男 ああ。起こすなよ。

女 C わかつてる。

女 B あ、あたしも。ああ、良いから、母さん、座つてて。

女 B C は病室に入るように女 A の側に行き、様子を見る。女 A は寝ている。男と女 D は病室の外でベンチに腰掛けている様に見える。  
女 A の寝息が歌のようにも聞こえる。

女 C 今なんか言つた？

女 B つて言うか唄つた？

女 C 寝言？

女 B 寝唄？

女 C ばあちゃん？

女 B ちよつと。

女 C あ、うん。目覚めたのかなつて思つて。

女 B うん、でも。

女Aはすやすや寝ている。

女C 何か、変な言い方なんだけど。

女B うん？

女C 笑ってるみたい。

女B うん。

女C 苦しくはないみたいだね。

女B きつともう十分苦しんだんだよ。

女C ああ。

女B うん。

女C どう思ってたんだろ。

女B 何を？

女C この世界を。

女B 一度、聞いてみたかったな。

女C みたかったって。

女B 何？

女C 言い方、悪い。

女B あ、違うって。

女C うん。

女B ・・・何かね、話したくないって。

女C うん？

女B 父さんが言ってた。

女C そっか。

女B 辛かったんだよ、きつと。

女C きつと、今でも、なのかな。

女B こんな世界に？

女C こんな世界か。

女B うん。ね、憶えてる？

女C うん？

女B 平和記念資料館に行った時の事。

女 C ああ。

女 B うん。

女 C はしやぎ過ぎてたんだよね。

女 B だって。

女 C ま、子供だったしね。あたしは何にも憶えてない。

女 B 色々知らなかったし。

女 C うん。

女 B あの日、あの日の夜、眠れなかった。

女 C うん。

女 B 目をつぶるとき、あの蠟人形たちがさ。

女 C こうやって。(ト、手をだらんと前に出して)

女 B 怖くて、怖くて、トイレにも行けなかった。

女 C うん。

女 B トイレの前までは行ったんだけどね。

女 C 何だ。

女 B 何だじゃなくて。前って言うか、トイレに続く廊下の端に立ちつくし

てた。

女 C ああ。

女 B そう、ばあちゃんの部屋の前。

女 C 廊下のこっち側、ふすまの部屋。ばあちゃんの部屋だったね。

女 B うん。廊下で動けなくなってたあたしを、ばあちゃんは部屋に入れて

くれた。

女 C へえー。

女 B でね、どこから市内地図を取り出して来て、布団の上に広げて見せ

てくれた。

女 C うん。

女 A が起き上がる。するとそこはかつてのばあちゃんの部屋になる。

女 A 資料館。

女 B うん。

女 A 怖かったか？

女 B うん。

女 A そうか。

女 B ばあちゃん。

女 A ん？

女 B 又、落とされる？

女 A うん？

女 B 原爆。

女 A さあな。

女 B そう。

女 A これ、解るか？

女 B うん。

女 A ここがな、うちの有る所。

女 B うん。

女 A それで、ここが原爆の落とされた所。

女 B ……。

女 A 計ってみるか？何センチあるか。

女 A は地図に物差しを置き計る仕草。

女 A 何センチある？

女 B 5。

女 A この地図は、えっと、1センチが500メートルだから、5センチだと？

女 B 2.5キロ。

女 A そう。

女 B うん。

女 A あのな、原爆を落とされた時に壊滅したのは、半径何キロだ？

女 B 知らない。

女 A そっか。



女 B うん。

女 A だいたいな、半径2キロの地域なんよ。

女 B うん。

女 A な、うちは大丈夫。

女 B うん。

女 A それにな、ほれ、ここに山がある。物差し当ててみ・・・ほらな、う

ちはこの山の裏つかわになって、影になるから尚の事、大丈夫。

女 B うん。

女Aは横になる。情景は再び病院の一室になる。

女 C ね、ちよつと待って。

女 B 何？

女 C 納得したの？それで。

女 B うん。

女 C 単純ねえ。

女 B ま、子供だからね。何か解んないけど、同じ場所に落とされるって思

ってた。

女 C ふーん。

女 B 同じ場所にもう一度落とされるなんてあり得ない。ただでさえ理不尽

なのに、もう一度なんて。って理解したのは大人になってから。あの

時は、ばあちゃんその説明で何となく安心した。

女 C そう。

女 B あんな死に方、殺され方は嫌だっちは思ってた。

女 C うん。

女 B ふふふ。

女 C 何？

女 B でも、あれ、ばあちゃん、少しだけズラしてたんだよ。地図上のあた

したちの家。

女 C そうなんだ。

女 B これもさ、大人になって何となくマピオンで見てて解ったんだけどね。距離は2.3キロ、ぎりぎり山の影にならない場所だった、あのころのアパートの位置。

女 C そうなの？

女 B うん。ばあちゃんたらって思ったけど、わざとだったのか？本気で間違えてたのかは解んない。

女 C うん。

女 B でもね、その地図を見た後、ばあちゃんはあたしを抱きしめてくれた。

「大丈夫、大丈夫。きっと皆が、お前を守ってくれるから、だから大丈夫」って。

女 C そう。

女 B そこで、気が緩んじやったのね。

女 C 何？

女 B そのまんま、ばあちゃんの布団の上に貯まりに貯まってた、おしっこが・・

女 C もう。

女 B へへ。

女 C ばあちゃん、何にも話してくれなかったけど、それでも良いんじゃないかな。

女 B うん。

女 C ばあちゃん、生きてくれてたから、あたしたちがある訳だし。

女 B そうね。

女 C ね、知ってる？

女 B 何？

女 C あたしの今住んでる街ではね、六日の八時十五分にサイレンが鳴らないんだよ。

女 B え、そうなんだ。

女 C うん。こっちだけなのかな？

女 B さあ、どうなんだろう。

一方、病室の外では。

男 母さんな、結局何も話してはくれなかった。

女 D そっか。

男 小さい頃の話しだし、ほとんど憶えてないって。

女 D 本当にそうなんじゃない？

男 でもなあ。

女 D 記憶の遠い所に押しやる事でバランスとれてたんじゃない？

男 まあそうなんだけどね。

女 D 休ませてあげましょうよ。

男 ああ、うん。

女 B C が病室を出て、二人のもとにやって来る。

女 D ああ。

女 B うん。

女 C 大丈夫そう。

男 ああ。

女 B 何か寝言、言ってた。

女 C 寝唄？

女 D 唄？

女 C 何か、鼻歌っぽい感じで。

男 そうか。

女 C ふーふふふーん、ふーふふふーん。(ト、鼻歌ってみる)

女 B 下手くそ、全然違う。

女 C じゃ、やってみてよ。

女 B ふーふふふーん、ふーふふふーん。(ト、正確に鼻歌ってみる)

女 D 知ってる？

男 うーん。

女 C 何の曲だろね？

女 B うん。

男 寝言なんだろ？

女 B には結構しつかり。

男 目、さましたのか？

女 C 少し声かけてみたけど、すぐ寝息に変わったから。

男 そうか。

世界はその情景を変える。女Aが起き上がる。男と女BCDは女Aを取り囲む様に座る。しばしの沈黙。

男 さて、どうします？

女 A ええ、何か大きなものを背負っていかなければならないんですね。

男 それはあなたの考え方次第です。

女 A ええ。

男 あの日に戻って、八月六日に戻って、そこでやめてしまう事だって出  
来ます。

女 A あなたたちは誰なんですか？神さま？

男 神は信じないのでは。

女 A ええ。

男 まあ、でも似たような存在かも知れませんね。ある意味、苦痛を計る  
概念なのかも知れませんか。

女 A そうですか。

男 決めるのはあなたです。

女 A ええ。

女 B あらあら。

女 C あらあら、あらあら。

女 B 大変な事になったねえ。

女 D 何が？

女 B 何がって、あんた、これじゃまるで、ねえ。

女 C そうそう。これじゃねえ、本当に。

女 B 戦争。

女 D 経験した事なくせに。

女 B そりゃ、まあね。

女 D で？

女 C 戦争みたいよ。

女 B 久しぶりに。

女 C 久しぶりって、フキンシンな。

女 D ふーん。

女 C ふーんってあんなね。

女 B じゃあ、又。

女 C 又ってあんなね。

女 B ま、関係ないけどね。

女 D そうそう。

女 C でも関係ないかも知れないけど、大変だよね。

女 B 本当にそう思う？

女 C だって、戦争だし。

女 D うーん。

女 C 人が死ぬし。

女 D 人ぐらい、毎日毎日死んでるやん。

女 B まあ確かに死んではいるね。

女 C 人が人を殺すし。

女 D それも毎日の様におこっているよ。

女 B あたしたちが気にしたってねえ。

女 C そっか。

女 B 何にも出来ないし。

女 D どうにも出来ないし。

女 C じゃ、祈っとく？

女 B 誰に？

女 C 神さま？

女 D 仏さま？

- 女 B 稲生さま？
- 女 C ん？
- 女 B 所詮はヒトの造りしモノ。
- 女 C ま、自分の為に祈ってるんだし。
- 女 D なんと利己的な。
- 女 C 宗教なんて、そんなものでしょ。
- 女 D お、言うねえ。
- 女 B 誰かが自分の幸せを祈れば、犠牲をとまなう。
- 女 C きつと誰かが犠牲になる。
- 女 B 誰かの幸せの為に、他の誰かが犠牲にならないで？
- 女 D 戦争みたいよ。
- 女 B あらあら。
- 女 C あらあら、あらあら。
- 女 B 大変な事になったねえ。
- 女 D 何が？
- 女 B 何がって、あんた、これじゃまるで、ねえ。
- 女 C そうそう。これじゃねえ、本当に。
- 女 D ほんま、これじゃあねえ。
- 女 B ホントいつまでたっても。
- 女 C 変わらないねえ。
- 女 D そやなあ。
- 女 B 同じ事の繰り返し。
- 女 D ええの？
- 女 B こんな世界でも。
- 女 C 人と人が殺戮を繰り返す世界。
- 女 D それを仕方がないって言い訳する世界。
- 女 A こんな世界。

カチカチと言う時計の音が聞こえて来る。

女 A でも、想像すれば世界は変容するんですよ。

男 ええ。

女 A それがこの世界のルール。だったら、想像すればいい、イメージすれば良いんですよ。

男 そうですね。

女 D 忘れんといてな。

女 B あたしたちの事。

女 C あんまり憶えてないかも知れないけど。

女 B キヤラメルやら。スリッパやら。

女 C 石切りのことやら。

女 D ずっとそばにおるから。

女 B だからね。

女 C おらんようになるけど。

女 D あんたは生きて。

男 想像してみて。

女 A ……。

女 C ろくでもない世の中になって行ってしまうんかも知れんけど。

女 D あんたが生きとったら、あたしたちもな。

男 だから、想像してみて。想像すれば世界は変容するかもしれない。こ

の小さな世界からもう少し大きな世界へ。想像すれば、世界は変わる。

女 D あんたは一人やないから。

女 B あたしたちがおって。

女 C 生きて、その子供たちがおって。

女 D さらにその子供たちがおる。血なんか繋がってなくてもええねん。生きて、生きた事を証としたりええねん。その証が家族を作って、そして

たら又、誰かが想像する。

男 誰かが想像する小さな世界。

女 A あたし、

男 時間だ。

カチカチと言う時計の音。

女 B ほら、あそこ。

女 C ああ、そうね。

女 D あ、ほら、何か・・・

顔を覆う女A。ザーと言うノイズの音。

暗転。女Aの声がする。

女 A 例えば、ここを。

柔らかな朝の光りが舞台を包む。舞台上には誰もいない。周りにたたずむ女B C Dと男。女Aの姿がない。女Cが舞台の上にあがり自分の位置を確保して、ぼんやりと遠くを眺める。女Bが舞台上にあがって来る。

女 B おはよ。

女 C うん。

女 B 何？何か見えるの？

女 C うん。

女 B 何よ。

女Bは女Cのそばに寄り、同じ様に遠くを眺める。

女 B ふーん。

女 C うん。(ト、微笑んでいる)

女Dが舞台の上にあがる。



女 D ちよつと、あんたたち、起きとるんやったら、少しは手伝ってや、ホ  
ンマに。・・・何？何か見えるん？

女 B・C うん。

女 D 何？

女 D も B C の側によつて座つて、同じ様に遠くを眺める。

女 D ふーん。

女 B・C うん。

男が舞台にあがる。

男 おはよ。

女 B・C・D おはよー。

男 どうしたの？皆で。

女 B・C・D うん。

男 何か、面白いもんでも見える？

女 B・C・D うん。

男 何？

男も並んで座る。

男 ふーん。

4人は優しく遠くを眺める。

女 A が現れ、舞台上にあがる。

女 A おはよう。

4人は反応しない。

女Aは4人の視線の先にあるものを見ようとゆつくりと動いていく。そして少し離れた所から同じ風景を眺める。

女 A 今日暑くなりそうだねえ。

ゆつくりとうなづく4人。

女 C ねえ、

女 A 何？

女 C 世界は、どうして、こんなにも、

ザーと言うノイズにかき消される女Cの声。でも、女Aには聞こえたようだ。同意の微笑みを浮かべる女A。4人は女Aを見つめる。

ノイズ音がふっと途切れて、家族は朝日に包まれ、一日が始まる。

おしまい

### 引用

日本国憲法第9条

自衛隊法第3条

2001年9月11日放送NHKニュースでのコメント

### 参考

古今亭志ん朝「黄金餅」

NHKスペシャル「原爆投下・10秒の衝撃」